考えはまだ固まっていなかったため，どちらの表記でも良いかもしれないと思っていた．Moyer さんのように日本語を知っている英語圏の研究者は，島＋島という表記を避けたがる傾向がある．その理由を考えてみると，「島」という名詞が普通名詞になることを知っているからかもしれない．しかし，大島，利島，三宅島という地名は，固有名詞である．固有名詞の中に普通名詞にもなる「島」という語は入っているが，地名そのものとしては，固有名詞である．固有名詞としての島や川の名称を英語に表記して，しかも，英語表記から日本語の地名に戻ることができる方法としては，Miyake-jima Island が最も良い表記方法ではなかろうか．島であることを英語で明示するためには，Miyake-jima Island とするのが適切な表現だと思われる．なお，Miyake-jima Island の Island を island と表記することを勧める外国人がいるが，固有名詞である三宅島に普通名詞の island を用いる必然性はないであろう．当たり前のことであるが，日本語と英語は異なる言語であるから，英語の文法を日本語に適用すると無理が生じる．利島は To-shima Island または Toshima Island と表記するのが適当であり，To-shima island という表記は，日本人から見たら奇妙な感じがする．

地名の英語表記については，国土地理院が地名等の英語表記ルールを発表している（国土交通省国土地理院，2016a）．提唱されている英語表記方法として，置換方式と追加方式の二つがある．置換方式とは，名称を「固有名詞的部分」+「普通名詞的部分（地形・種別を表す部分）」と捉え，ローマ字表記における普通名詞的部分を英語に置き換える，というものである．つまり，筑波山は，筑波（Tsukuba）+ 山（san）と捉え，san を Mt. に置き換え，Mt. Tsukuba と記す，というものである．なお，国土地理院はローマ字表記の方式として，ヘボン式によるとしている．

追加方式とは，名詞の構造上，置換方式を適用できない場合や日本人が置換方式の英語から元の日本語の地名を認識することが困難な場合など，名称全体を一まとまりとして扱うべきものは，ローマ字表記に地形・種別を表す英語（Mt., River など）を追加する，というものである．荒川は置換方式による Ara River では日本人に通じないので，Arakawa River，八重干瀬は名称にサンゴ礁が含まれず置換方式は適用不能であるため，Yabiji Coral Reef と記すというものである（国土交通省国土地理院，2016b）．

国土地理院の提唱は，地名の英語表記の揺れを統一しようというものであり，歓迎すべき試みである．ただし，一貫性という点では，問題を残している．魚類は地球のさまざまな海域や地域に生息しているため，さまざまな言語によって分布域や生息場所が表記されている．多様な表記を英語という一つの言語に押し込めようとすれば，どうしても無理が生じる．言語の多様性は配慮されなければならないのであるから，英語としての表記の一貫性を考慮しながら，元の言語の特性にも留意して自然地名を英語で表記する必要があるだろう．

引用文献

国土交通省国土地理院．2016a．地名等の英語表記規定．国土交通省国土地理院，15 pp.

国土交通省国土地理院．2016b．地名等の英語表記ルールの概要：https://www.gsi.go.jp/common/000138867.pdf（参照 2019-8-28）．

Matsuura, K. 1976. Sexual dimorphism in a triggerfish *Balistapus undulatus*. Japan. J. Ichthyol., 23: 171–174.

Matsuura, K. 1980. A revision of Japanese balistoid fishes. I. Family Balistidae. Bull. Natl. Sci. Mus., Ser. A, 6: 27–69.

Matsuura, K. and J. Okuno. 1991. Redescription of a rare pufferfish, *Arothron carduus* (Cantor, 1849) (Teleostei: Tetraodontidae). Bull. Natl. Sci. Mus., Ser A, 17: 157–164.

（松浦啓一　Keiichi Matsuura：〒 305–0005　茨城県つくば市天久保 4–1–1　国立科学博物館　e-mail: matsuura@kahaku.go.jp）

会記・Proceedings

魚類学雑誌 66(2):296–298
2019 年 11 月 5 日発行

2020 年度年会のお知らせ

2020 年度年会の予定をお知らせします．詳細については 2020 年 4 月に出版される魚類学雑誌 67 巻 1 号に掲載します．

期　日：2020 年 9 月 18 日（金）– 9 月 21 日（月）
18 日　編集委員会・代議員総会
19 日 –20 日　研究発表会
21 日　シンポジウム

会　場：長崎大学文教キャンパス
〒 852–8521　長崎県長崎市文教町 1–14

シンポジウム・セッションの申し込みについて

2020 年度年会でシンポジウムまたはセッションを計画されている会員は，下記の要領で申し込み書類を作成し，電子メールで担当庶務幹事までお送りください．会場および日時の制約上多数の申し込みがある場合には調整を計りますので，あらかじめご了承くださるようお願いします．なおセッションとは，シンポジウムのように 1 日を費やすほど大規模ではないが，年会

参加者に関心の高いトピックを同じ時間帯に集め，1–2 時間（1 時間あたり最低 3 人の講演者）を限度に，より議論を深めようというものです．コンパクトなテーマの場合には是非ご活用ください．

申込先：〒 187–8570　東京都小平市小川町 1–830
白梅学園短期大学保育科
日本魚類学会庶務幹事（年会担当）　宮崎佑介
TEL: 042–313–5528（直通）　FAX: 042–346–5644
e-mail: miyazaki@shiraume.ac.jp

必要事項：(1) 和文標題，(2) 英文標題，(3) 企画者氏名，(4) 趣旨説明（1000 字以内），(5) 演者と演題，(6) 連絡先住所・氏名（電話，ファックスおよび e-mail）．なお，標題や演者・演題は暫定案でも結構ですが，内容が明瞭にわかるようにしてください．ただし，実施時の内容と大きく異なる暫定案を作成することは避けてください．

申込締切：2020 年 1 月 31 日

2019 年度年会

2019 年度年会が 2019 年 9 月 20 日（金）–9 月 23 日（月）に高知大学朝倉キャンパスにおいて開催され，以下の会合があった．

1. 2019 年度第 1 回編集委員会

9 月 20 日（金）12:00–14:00 に編集委員 11 名および編集顧問 1 名が出席して 2019 年度第 1 回編集委員会が開催された．

2. 2019 年度第 1 回代議員総会

9 月 20 日（金）15:00–17:00 に代議員 19 名（他に委任状 11 名），会長，庶務幹事 2 名，会計幹事 2 名が出席し，2019 年度第 1 回代議員総会が開催された．議長には渡辺勝敏氏が選出された．議事は以下の通りで，報告，答申および来年度活動方針案は原案通り採択された．【報告】(1) 2018 年度会務報告；(2) 2018–2019 年度編集報告；(3) 2018 年度決算報告および同監査報告；(4) 2019 年度収支予算；(5) 2019 年度事業計画書；(6) 自然保護委員会からの報告；(7) 学会賞選考委員会（担当理事）からの報告；(8) 日本魚類学会史委員会からの報告；(9) 標準和名検討委員会からの報告；(10) 電子情報委員会からの報告；(11) 男女共同参画委員会からの報告；(12) 日本分類学会連合に関する報告；(13) 自然史学会連合に関する報告；(14) 水産・海洋科学研究連絡協議会に関する報告；(15) ABS 対策チームからの報告；(16) 理事・副会長候補者および代議員選挙の結果報告；(17) その他．【審議】(18) 2018 年度貸借対照表と損益計算書（正味財産増減計算書）；(19) 2019 年度の新役員；(20) 名誉会員の推薦と学会活動貢献者への感謝状授与；(21) その他．【その他】(22) 今後の年会開催予定（2020 年度：長崎大学文教キャンパス；2021 年度：福井県立大学永平寺キャンパス；2022 年度：大阪市立大学杉本キャンパス）．

3. 2019 年度第 1 回会員総会

9 月 21 日（土）12:10–13:00 に会員 91 名が出席し，2019 年度第 1 回会員総会が開催された．議長には渡辺勝敏氏が選出された．議事は以下の通りで，報告，答申および来年度活動方針案は原案通り採択された．(1) 2018 年度会務報告；(2) 2018–2019 年度編集報告；(3) 2018 年度決算報告および同監査報告；(4) 2019 年度収支予算；(5) 2019 年度事業計画書；(6) 自然保護委員会からの報告；(7) 学会賞選考委員会（担当理事）からの報告；(8) 日本魚類学会史委員会からの報告；(9) 標準和名検討委員会からの報告；(10) 電子情報委員会からの報告；(11) 男女共同参画委員会からの報告；(12) 日本分類学会連合に関する報告；(13) 自然史学会連合に関する報告；(14) 水産・海洋科学研究連絡協議会に関する報告；(15) ABS 対策チームからの報告；(16) 理事・副会長候補者および代議員選挙の結果報告；(17) 新会長挨拶；(18) 今後の年会開催予定（2020 年度：長崎大学文教キャンパス；2021 年度：福井県立大学永平寺キャンパス；2022 年度：大阪市立大学杉本キャンパス）；(19) その他．これらの記事のうち，(6)，(8) から (15) の報告は省略された．

4. 日本魚類学会賞授賞式および奨励賞受賞講演

日本魚類学会賞奨励賞は乾　隆帝氏が受賞し，9 月 21 日（土）13:40–14:10 に「魚類をはじめとする水域生態系の保全と持続的な利活用を目指して」のタイトルで受賞講演が行われた．

論文賞は下記の 2 論文の著者に授与された．

北西　滋氏，高村健二氏，中島　淳氏，鬼倉徳雄氏，向井貴彦氏「Phylogeography of *Opsariichthys platypus* in Japan based on mitochondrial DNA sequences. Ichthyological Research 63(4): 506–518.」

澤井悦郎氏，山野上祐介氏，坂井陽一氏「Redescription of the bump-head sunfish *Mola alexandrini* (Ranzani 1839), senior synonym of *Mola ramsayi* (Giglioli 1883), with designation of a neotype for *Mola mol*a (Linnaeus 1758) (Tetraodontiformes: Molidae). Ichthyological Research 65(1): 142–160.」

5. 感謝状授与式

9 月 22 日（日）19:45–19:55 に懇親会会場（ザ・クラウンパレス新阪急高知）にて，東海大学出版部の稲　英史氏に対して感謝状の授与を行った．

6. 2019 年度第 1 回自然保護委員会

9 月 21 日（土）11:25–12:10 に自然保護委員 12 名が出席し，2019 度第 1 回自然保護委員会が開催された．

7. 研究発表会・シンポジウム

口頭発表第 1 会場・第 2 会場・ポスター発表会場に分かれ，一般 211 題および中・高生発表 10 題（うち中学生 1 題）の研究発表が行われた．中・高生発表では，最優秀賞（白陵中学校高等学校），優秀賞（奈良学園中学校高等学校），奨励賞（和歌山県立向陽中学校）が年会実行委員会により選出された．参加者は開催期間を通じて 448 名（内当日参加 97 名）であった．9 月 20 日（金）には，下記のサテライトシンポジウムが開催され，約 91 名が参加した．

「日本魚類学会若手の会キックオフシンポジウム～学会の持続的な発展を目指して～」

また，9 月 23 日（月）には，下記の 3 件のシンポジウムが開催され，延べ 212 名が参加した．

「古代湖における魚類の適応進化と種多様性創出」

「スウェーデンの Vega 号が採集した 140 年前の日本産標本群の意義―分類学的研究に基づく標本の役割を再考：過去の生物多様性復元，今日の環境保全，未来世代への記録と保存」

「野生メダカを守る～基礎研究から保全の提言まで～」

8. 学生優秀発表賞

平成 29 年度から学会の公式の賞として新設された学生優秀発表賞（外国人学生を含む学生会員対象）を今年度も実施した．口頭発表賞応募の 35 件から下記の最優秀賞 2 題と優秀賞 3 題，ポスター賞応募の 47 件から下記の最優秀賞 3 題と優秀賞 4 題が選出された．

最優秀口頭発表賞

・早崎佑亮（福井県立大学）「琵琶湖水系のヒガイ類における暗色型原因アリル頻度の空間的動態」
・福地伊芙映（琉球大学）「琉球列島から得られたボラ科稚魚の同定」

優秀口頭発表賞

・林　希奈（琉球大学）「ミツボシクロスズメダイ未成魚の宿主イソギンチャク選択に与える共生クマノミ類の影響」
・加藤柊也（東大水実）「九州周辺におけるアゴハゼの分子系統地理」
・森下悟至（鹿児島大学）「カマス科魚類 *Sphyraena novaehollandiae* 類似種群の分類学的再検討」

最優秀ポスター賞

・佐藤　初（広島大学）「ニセクロスジギンポの繁殖生態－沖縄県からの初報告－」
・植村洋亮（愛媛大学）「産卵床であるイシガイ類の減少によるタナゴ類の在来種と国内外来種との交雑」
・佐藤健介（京都大学）「ビワヨシノボリの集団構造，形態的多様性，および近縁種との遺伝的関係」

優秀ポスター賞

・出羽優凪（鹿児島大学）「沖縄県から得られた標本に基づく日本初記録のベラ科魚類 *Oxycheilinus arenatus*」
・千田哲朗（北海道大学）「セキトリイワシ属の単系統性の検証」
・佐藤　陽（東京海洋大学）「クツワハゼ *Istigobius campbelli* の繁殖戦術にかかる birthdate effect の検討」
・梅村啓太郎（九州大学）「タナゴ類の二枚貝における産卵状況確認手法の開発」

9. 懇親会

懇親会は 9 月 22 日（日）18:30–21:00 にザ・クラウンパレス新阪急高知にて開催され，300 名が参加した．

10. オークション

書籍のオークションが行われ，714,000 円の基金が得られた．遠藤広光氏，岡村久美氏（故岡村　收氏），木村清志氏，酒井治己氏，桜井　雄氏，瀬能　宏氏・益田安規子氏（故益田　一氏），高村健二氏，仲谷一宏氏，松浦啓一氏，本村浩之氏，山川　武氏（五十音順）から所蔵品を寄贈していただいた．

11. 代議員会・総会抜粋資料

会員数（7 月 31 日付け退会・8 月 1 日付け入会現在）

会員種別		2018 年	2019 年	増減
個人	一般会員	903	881	–22
	学生会員	180	195	+5
	外国会員	57	57	0
名誉会員		6	6	0
団体会員		74	74	0
賛助会員		1	1	0
計		1,221	1,214	–17

2018–2019 年度編集報告

（1）投稿論文

2018 年：216 編（英文誌 165 編，和文誌 51 編）

投稿論文内訳

英文誌：分類 38；系統 1；形態 11；行動 2；生態 41；稚魚 5；遺伝 19；生理 19；その他 29

和文誌：分類 7；系統 0；形態 1；分布 5；行動 2；生態 12；稚魚 3；遺伝 3；生理 0；その他 18

2019 年 7 月 31 日現在：117 編（英文誌 96 編，和文誌 21 編）

投稿論文内訳

英文誌：分類 15；系統 1；形態 11；行動 3；生態 25；稚魚 4；遺伝 19；生理 2；その他 16

和文誌：分類 4；系統 0；形態 1；分布 7；行動 2；生態 2；稚魚 0；遺伝 2；生理 0；その他 3

（2）原稿受付から出版までに要する日数

英文誌（65 巻 1 号から 65 巻 4 号まで）

受付から出版までの日数

最短期間 174 日；最長期間 607 日；各号の平均期間は 289（65 巻 2 号）から 331 日（65 巻 3 号）

和文誌（65 巻 1 号から 66 巻 1 号まで）

受付から出版までの日数

最短期間 73 日；最長期間 475 日；各号の平均期間は 213 日（65 巻 2 号）から 246 日（65 巻 1 号）

2019 年度一般社団法人日本魚類学会活動方針

（1）代議員選挙の実施
（2）新体制の発足（代議員および役員）
（3）年会開催と開催準備（2020 年 9 月 18 日 –21 日，長崎大学文教キャンパス）
（4）市民公開講座の開催